箱舟

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
箱舟

【Ｎコード】
Ｎ９８３７Ｅ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
箱舟を作り選ばれた者達だけを救うことを告げられたノア。しかし彼は悩む。それが正しいのかどうか。彼が下した決断は。

第一章

箱舟

ノアがその言葉を受けたのは。彼の徳からだった。
「ノアよ」
厳かな声だった。その声の主が誰か、ノアはすぐにわかった。
「私は決めたのだ」
「決めたといいますと」
「最早世界は救われぬ」
あまりにも断定的な言葉だった。誰も逆らえない程の。
「世には悪徳が満ち誰も神を。私を信仰せぬ」
「誰もが」
「しかし御前とその家族だけは違う」
またしてもあまりにも断定的な言葉だった。そこには何の無謬性もない。そこまで徹底して無謬した言葉だった。まさに神の言葉だった。
「御前達だけは生きよ」
「私達だけは」
「そうだ。人で生きてよいのは御前達だけ」
神そのものの。過ちすら認めないような言葉だった。
「全ての動物はつがいだけ残す。全ての動物もまた」
「それ以外の動物は」
「滅びる」
一言だった。判断が揺らぐことがないのがすぐにわかる言葉だった。
「つがいだけ残ればいいのだ」
「他の動物もですか」
「人は滅びねばならぬ」
最早動物のことは頭にはない返答だった。

「人が滅びるからこそ。動物もまた滅ぶ」
「動物達も」
「奴等には心がない」
神はそう決め付けた。自分だけで。
「心がないのなら当然だ。滅びてもよい」
「そうなるのですか」
「そうだ。今の人もまた同じ」
同じと言い切る。
「心が汚れている。我を崇めぬ」
「貴方を」
「悪徳がはびこり我を崇めぬ。ならば滅びてもよいのだ」
「私達以外は」
「してノアよ」
神はまたノアに対して声をかけてきたのだった。
「御前は御前の家族とつがいの動物達を入れる舟を作れ」
「舟をですか」
「我は世界に洪水を起こす」
やはりこの言葉もまた。何の過ちもないと確信する言葉だった。
その根拠は何か。やはり彼が神である、そのことに尽きる言葉であった。
「それにより滅ぼすからだ。よいな」
「全ての人も動物も」
「左様、全てのものを」
滅ぼすというのだった。
「滅ぼす。よいな」
ここまで言うと神の声は消えた。後に残ったのはノアだけだった。
彼は呆然とその場に立ち尽くし天を仰ぎ見るだけだった。それしかなかった。
「全ての人も動物も滅びる」
彼はそのことを呟く。

「どうすればいいんだ。神が滅ぼすとは」
呆然としたまま呟き続ける。しかしそれでも。彼は一旦家に戻り妻にこのことを話した。妻はそれを聞いてまずは暗澹たる顔になったのだった。
「私達以外というと」
「そうだ。周りの人達もだ」
ノアは沈痛な顔で答えた。
「この街の人達も皆。犬も猫も」
「そんな。それじゃあ」
「あの優しいシモンさんもヤコブさんもだ」
彼等はシモンの親友だ。彼が幼い頃からよくしてもらっている年上の親友なのだ。ノアは彼等が悪人とはとても思っていないのだ。
「わし等を守って下さる王様や兵隊さんもな」
「私達以外の全ての人が」
「滅ぼされる。神によってな」
神、絶対の言葉が出た。
「それはいいのか。あの人達は神を敬っていないか？」
「いいえ」
妻はすぐにその言葉に対して首を横に振った。彼女の目からは全くそうは見えなかった。これはあくまで彼女の主観であってもだ。
「皆それぞれ神を敬っているわ。これは本当よ」
「そうだよな。それはな」
ノアは妻の今の言葉にこくりと頷いた。彼から見てもそうとしか見えない。妻の言葉でそれが間違っていないことを確認することになった。
「確かなことだな。それに」
「それに？」
「わし等だけ助かっていいのか」
彼が次に問題としたのはこのことだった。
「わし等が神を正しく敬っているというだけでわし等だけ助かって

いいのだろうか」
「それは」
「わしは。よくないと思う」
ノアは言った。
「わし等だけ助かっては。ならない」
「皆助かるべきね」
「そうだ。セムもハムもヤペテも」
ノアの息子達だ。三人共結婚しそれぞれ妻をもうけている。三組の夫婦もまたノアの家族である。つまりノアの家は八人家族なのである。
「他の皆も助かるべきだ。洪水の前に」
「けれど神は」
「そうだ」
沈痛な声で述べた。
「それもある。しかしわしは」
「私も」
ノアと妻の言葉が完全に重なり合った。その心も。
「皆を見捨てて私達だけで助かることはできないわ」
「そうだ。それに」
ノアはさらに言葉を続けた。
「動物達もつがいだけだ」
「動物達も」
「その他の動物達も滅ぼすと申されている」
「そんな、人が神を敬っているかどうかさえわからないというのに」
これは妻から見た目である。しかし神から見ればそうではない。神の目は絶対なのだ。絶対であるからこそが神なのだからだ。
「動物達まで。人とは何の関係もないというのに」
「動物に心はないというのだ」
ノアは神の言った言葉をそのまま妻に告げた。俯きつつ。
「だからつがいだけ残して滅ぼしてもいいと仰るのだ」

「つがいだけを舟に乗せるのね」
「洪水により滅ぼし」
ノアはこのことも言う。
「わし等だけが残るのだ。正しい心を持つわし等だけが」
「それは違うわ」
妻はノアの言葉にまた首を横に振った。
「決して。違うわ」
「そうだな。違う」
ノアの声が変わった。表情はそのままだが強い声になって妻の言葉に頷くのだった。
「わし等だけ助かっていいものじゃない」
「ええ、その通りよ」
「神は仰った。箱舟を作れと」
「箱舟ね」
「そうだ。それに乗り洪水を避けよと」
「じゃあその箱舟を作り変えましょう」
妻は言った。
「私達だけでなく皆が入られる程の大きな箱舟を作りましょう」
「作るのだな」
「ええ、作りましょう」
またそれを言うのだった。ノアに対して。
「そうじゃないと意味がないわ。皆が助からないと」
「そうだな。それしかない」
決意した声だった。もう迷いはない。
「それが正しい筈だ」
「そうよね。ただ」
「ただ？」
「正しいのは神だけ」
これはヘブライの者達の考えだった。ヘブライの者達にとって神は絶対である。だからこそここで正しいかどうかという問題になる

のであった。

第二章

「それを考えたら」
「しかしだ」
ノアは妻に対してまた言うのだった。
「多くの命を見捨てることなぞ。正しいわけじゃない」
「しかし神は仰った」
「だが。それでもだ」
今度は妻に対してかけた言葉だった。
「御前もそうなのだろう？わしと同じ考えだな」
「ええ、それはね」
それは否定しない妻であった。
「その通りよ。他の人達も動物達も誰も見捨てられないわ」
「よし、決まった」
ここで遂に彼の考えは決まったのだった。ノアの考えが。
「それではだ。船を作ろう」
「ええ」
妻はノアの言葉に対して頷いた。
「とてつもなく大きな舟をね」
「皆に乗ってもらう」
ノアは断言した。
「シモンさんやヤコブさんだけではない。皆がだ」
「動物達も全てね」
「そうだ、わしはもう迷わない」
妻に対してだけでなく自分自身に対してもかけた言葉であった。
そうして自分自身に決意を促していたのである。固い決意をさらに固いものにする為に。
その日からノアは家族に全てを話したうえで舟を作りはじめた。
その舟のあまりにも大きなのを見て誰もが大いに驚くのであった。

「ノアさん、これは一体」
「何の舟ですか？」
「皆が乗る舟です」
ノアは周りの問いにこう答えるのだった。答えながら舟を作っていく。その山よりも大きな舟を。黙々と建っていくのであった。
「皆が！？」
「そう、皆です」
汗をそのままにして語るノアだった。
「皆がこれに乗って助かる為に」
「助かる！？何が何だか」
「わかりませんな」
誰もがノアの返答に一度は首を捻る。しかしノアは正直者で嘘をつかない、またいつも誰かの為に動く男と知っていた。つまり信頼があったのである。
「いや、ノアさんのことだ」
早速誰かが言い出した。
「これは間違いなくわし等の為に舟を建っておられるのだ」
「わし等の為か」
「そうだ、ノアさん」
また別の者がノアに対して尋ねてきた。
「どうしてその様な大きな舟を建っておられるのですか？」
「そうですな。それです」
彼等もそれを尋ねるのだった。
「どうしてまたそんなものを」
「一体全体」
「それは」
ノアは語ろうとする。しかしここで。不意に彼の心の中であの声が聞こえてきた。
「ならん」
まずは話すなと言ってきた。

「助かるのは御前達だけだ」
「貴方は」
「我が誰かわからぬ筈があるまい」
その通りだった。それがわからないノアではなかった。あの声だったのだ。
「我はこの者達を見捨てた。語ってはならぬ」
教えることはない。そう言っていたのだった。
「わかったな」
「それは」
「わかったら黙るがいい」
神は言う。
「この者達に対しては。よいな」
ここまで言うと声は聞こえなくなった。ノアは心の中で神の声を聞いて迷った。その迷いは否定できない。だがそれでも。彼は否定したことがあったのだった。
「皆さん」
ノアは口を開いた。愛する者達の為に。
「お話して宜しいでしょうか」
「ええ、どうぞ」
「お話して下さい」
彼等もそれを受けてノアに話すよう促してきた。
「ノアさんのお話なら是非御聞きしたいです」
「ですから」
彼等も話すように促す。その言葉はノアを信じているからに他ならない言葉であった。そう、ノアは信頼されていた。ノアもまたそれを感じていたのだった。
「お話下さい」
「ノアさん、どうして」
「わかりました」
皆の言葉をまた受けて。ノアは遂に話す決意を完全なものにした。

彼はここで遂に神以外のものを選ぶことを完全に行動に移したのであった。
「お話しましょう。私が今こうして舟を建っているのは」
「はい」
「どうしてでしょうか」
「理由あってのことです」
彼は言うのだった。
「理由が？」
「そうです。間も無く洪水が起こります」
彼は言った。遂に。
「ですから皆さんが乗れるような舟を今こうして建っているのです。その為に今」
「成程、そうだったのですか」
「それで」
彼等はその言葉を受けて頷いた。これがノアにとってはいささか意外なことであった。
「信じて頂けるのですか？」
「ええ、勿論ですよ」
「ノアさんの言葉ですから」
彼等は笑顔で述べる。彼を信じている、それ以外のものはない言葉であった。ノアもまたそれを今見たのであった。他ならぬ己の目で。
「皆さん・・・・・・」
「他の人なら信じませんよ」
「なあ」
彼等はここで互いの顔を見合わせる。そのうえでまた言葉を続けるのだった。
「ノアさんだからですよ」
「ノアさんの御言葉ですから。信じますよ」
「そうなのですか」

「それなら手伝いますよ」
「わし等も」
それどころか。彼等は笑顔で前に出て来た。そうしてその手にもう様々な道具を握りだしていた。そのうえで舟に向かうのであった。
「えっ、まさか」
「そのまさかです」
「手伝いますよ、ノアさん」
笑顔でノアに言ってきた。

第三章

「是非やらせて下さい」
「わし等も」
「ですが。これは」
「だってあれですよね。この舟は」
まだ骨組みがやっと建られようとしている舟を見て彼等は言う。
「わし等の為にノアさんが」
「だったらわし等もしないと」
そう言って早速道具を手に舟に集まる。そうして皆で舟を建っていくのだった。
「そういうことです。だから」
「気にしなくていいですよ」
「皆さん・・・・・・」
ノアはこの時確信した。自分は間違っていないのだと。そして自分以外の者達も正しい心と持っているのだと。このこともまた確信したのだった。すると自然にその目から熱いものが溢れ出てきたのであった。
「有り難う」
皆に対して礼を述べたのだった。
「有り難うございます、本当に」
「あれっ、どうして」
「御礼なんて」
「見せて頂いたからです」6
涙を流しながら彼等に言葉を続けるのだった。
「心を」
「心！？」
「そうです」
また語る。

「貴方達の御心、見せてもらいました」
「何かお話がわからないんですが」
「どういうことですか？」
「そのままです。とにかく私は」
ノアはまた言うのであった。
「皆さんの為にこの舟を完成させます」
「私達の為にですか」
「そうです」
そのことをまた語っていく。涙のまま。
「何があっても完成させますので」
「じゃあ私達はノアさんの為に」
「この舟を完成させますよ」
彼等の言うのはまた違っていた。しかしそこにあるものは同じだった。彼等はそれぞれ他人の為に動いているのだ。それは同じであった。
「それでいいですよね」
「ノアさんの為に」
「有り難うございます」
ノアはまた彼等に礼を述べた。今の言葉でまた。
「では今から舟を」
「はい、頑張りましょう」
「ノアさんの為に」
「皆さんの為に」
彼等の心が一つになった。そうして途方もなく大きな舟を建っていく。舟は瞬く間に出来上がっていき遂には。舟は間も無く完成する段階にまで至った。ノアはその舟を見つつ己の妻に対して語るのだった。夕暮れの中に二人だけが舟の前に立っていた。
「もうすぐだな」
「そうね」
妻はまずノアの今の言葉に頷いた。

「もうすぐよ、本当に」
「舟が完成する」
ノアは満面の笑みで今度はこう語った。
「皆が乗る舟がな」
「皆なのね」
「そうだ、皆だ」
今度頷いたのはノアだった。妻の言葉に対して。
「皆が乗る舟だ。もうすぐだ」
「そうね。最初はどうなるかと思っていたけれど」
「これも皆のおかげだ」
ノアは語る。
「皆が頑張ってくれたからだ。これはな」
「そうね。皆のおかげね」
「なあ」
ノアはまた妻に声をかける。
「どう思う？」
「どう思うって？」
「神の御言葉だ」
このことを妻に語るのだ。今ここで。
「わしの家族とつがいの動物だけを助けよとのあの言葉だ」
「あの御言葉ね」
「そうだ。わしはあの御言葉に逆らっている」
はっきりと自覚していた。そしてもう後戻りできないことも。完全に把握していた。何もかもわかったうえで今妻に語っているのだ。
「はっきりとな」
「けれど。私は思うの」
「むっ！？何をだ」
「他の方々だけれどね」
舟の完成を手伝っている皆だ。神が信仰のない邪悪と断定した者達のことだ。

「本当に神に背いておられるのかしら」
「わしはそうは思わん」
この答えもまた決まっていた。ノアの中では。
「邪な方達でもない」
「そうよね」
「そうだ。本当にいい人達だ」
己の肌でそれを知っている。だからこそ言える言葉だった。舟を何に使うのか聞かずただノアの為に手伝っている。その心を知っているからこそだった。
「それがどうして神に背いておられるか」
「そうね」
「動物達もだ」
次に彼が言ったのは神がつがいだけ助けよと告げた動物達のことだ。彼はその動物たちのこともよく知っていた。いや、知ったのである。
「彼等も心がある」
「そうね、その通りよ」
「その証拠に」
彼等もまた舟の建造を手伝ってくれたのだ。やはりそれがどうしてなのかは聞かずただノアの為に。手伝ってくれたのである。それぞれの力で。
「わしの為に手伝ってくれている」
「だから動物達もまた」
「救われるべきだ。つがいではなく全てがな」
「そう、全てが」
「わしが今確信しているのだ。皆が助かり共に生きるべきだ」
「一緒になのね」
「神の起こされる大洪水の後で」
舟に乗り難を避けて。その後のことであった。
「皆一緒に生きるべきだと思う」

「神がどう思われても？」
「若しだ」
前置きであった。
「このことで神が罰を与えるならばだ」
「その時はどうするの？」
「わし一人が受ければいいことだ」
厳かに、確かに言う言葉だった。
「わし一人がな。神に背いたのはわしだけなのだからな」
「いえ、それは違うわ」
「違う！？」
「ええ、違うわ」
ここで妻は言った。ノアに対して。
「私も同じよ」
「御前・・・・・・」
「あなたに言われたわよね」
「あ、ああ」
「そして私はそれは違うと言ったわ。だから」
「どの様な罰かわからぬぞ」
神の怒りの激しさ、厳しさはノアも知っていた。神というものは厳格であり過ちを決して許しはしない。それは彼が絶対であり過ちを犯さないものだからだ。
「それでもいいのだな」
「あなたは覚悟されていたわね」
「その通りだ」
「それは私も同じよ」
静かに微笑んで述べたのだった。
「だから」
「いいのか」
「ええ、あなたと何処までも一緒よ」
微笑んだまままた述べてみせた言葉であった。

「二人でね」
「御前・・・・・・」
「さあ、今は」
彼女自身の覚悟を告白してから。今度は舟を見て語ってきた。

第四章

「舟を完成させましょう」
「皆が乗るこの舟をだな」
「ええ、この舟を」
「完成させよう」
「何があっても」
深く、心から誓い合うのだった。そして遂に舟が完成した。誰もが舟の周りにいた。ノアを慕ってあらゆる人と動物達がやって来て力を尽くした証である。
「できたぞ」
「遂にだな」
「ああ、できたんだ」
「やっと。舟が」
人々は口々に言い合う。見れば途方もなく巨大な舟がその姿を見せている。ノアだけでなく多くの者がその舟を見て満面に笑みを浮かべていた。
「完成したんだな。長かったな」
「ノアさん」
ノアを手伝った壮年の男の一人がここでノアに声をかけてきた。
「はい？」
「有り難う」
何故か彼はノアに礼を述べてきたのだった。これにはノアも目を丸くさせた。
「有り難う！？」
「そう、いい仕事をさせてもらったよ」
「ああ、そうだよな」
「全くだ」
そして他の者達もまた彼の言葉に応えて頷くのだった。人だけで

なく動物達もそれに続いて口でいななきをあげている。賛同しているということだった。
「あんたのおかげだよ、本当に」
「楽しませてもらったよ」
「楽しませてもらってとは」
これまたノアにはわからない言葉だった。やはり目を丸くさせたままになっていた。
「一体全体どうして」
「だから。あんたこの舟を完成させたかったんだろう？」
「だから健っていたんじゃないのか？」
「それはそうですけれど」
「だからだよ」
「それだからなんだよ」
皆ノアの今の言葉に応えてまた述べてみせたのだった。
「だから手伝わせてもらったんだ」
「他ならないあんたの為にな」
「わしの為に」
何度も言われてきたがここでも言われ。ノアの心に何かが宿った。
「それで有り難うとは」
「いい仕事をさせてもらったよ。だからなんだ」
「あんた、この舟で何かをするつもりだよな」
「ええ、まあ」
実は理由はまだ言っていない。皆それを聞くことなく彼に力を貸してくれていたのだ。これこそが彼の決意を確かなものにさせるものであったのだが。
「その通りですが」
「その何かをする為に働かせてもらったことが有り難いんだよ」
「俺達は」
「そうだったんですか」
そういうことだった。ノアはここでようやく彼等の心を全て理解

したのであった。理解するとノア自身の心が実に温かいものになるのであった。
「それで」
「そういうことさ」
「じゃあこの舟でそれをしてくれよ」
笑顔でノアに告げてきたのだった。
「あんたがしたいことをな」
「何があっても」
「ねえあなた」
ここでこれまで沈黙を守って彼の横に立っていた妻が。そっと彼に囁いてきた。
「もう。行ったらどうかしら」
「どうしてこの舟を建ったかをか」
「そう、それをね」
それを言ってはどうかと。夫に言ったのである。
「どう？もう」
「そうだな」
ノアは素直に妻の言葉を受けて頷いた。
「いいな。確かに」
「ええ。最初から決めていたことだし」
「そうだ。それにだ」
ノアの声が強いものになった。
「この人達なら」
「ええ、そうね」
今度は妻がノアの言葉に頷いていた。
「大丈夫だから。何があっても」
「そうだな。よし」
ノアは意を決した顔になった。そのうえで皆に声をかけてきた。
「皆さん、宜しいでしょうか」
「んっ、何だ」

「どうしたのですかな、ノアさん」
「お話したいことがあります」
まずはこう前置きしてきた。
「お話したいこととは」
「一体。何でしょうか」
「この舟のことです」
ここで一旦。舟を見た。途方もなく巨大なその舟を。この世の全てが入ってしまいそうなその舟を見て。彼は語り続けるのであった。
「この舟の」
「そうです。実はですね」
一呼吸置く。言葉を真剣に選んでいた。
「間も無く洪水が起こります」
「洪水！？まさか」
誰かが今のノアの言葉を否定した。
「そんな筈が。それどころか今は雨が少ないのに」
「いや、待て」
だが今の言葉は。別の者にすぐに否定された。その根拠は。
「ノアさんの言葉だぞ」
「ノアさんの」
「そうだ、ノアさんは嘘は言わない」
その男は強い声で言うのだった。
「違うか、それは」
「確かに」
そしてこの言葉はすぐに受け入れられた。
「ノアさんだな。だったら」
「そうだ、今の言葉は嘘じゃない、本当だ」
「本当なのか」
ノアの持っている徳と信頼が表われた流れであった。誰もがノアを心より信頼していたからこそ信じられたのであった。全てはノア自身の為したことであった。

「それでノアさん」
「はい」
自然とノアへの問いになっていた。
「その洪水はどうして起こるのですか」
「神です」
ノアは神を出してきた。
「神！？」
「そう、神が起こされる洪水なのです」
彼は遂にこのことを皆に対して告げたのだった。禁じられていたことをしたのだった。
「神がですか」
「わしは皆の為にこの舟を完成させたかったのです」
「なっ・・・・・・」
これを聞いて。誰もが絶句した。
「わし等の為に」
「何と・・・・・・」
「皆さん」
ノアはあらためて一同に声をかける。

第五章

「この舟は皆で乗りましょう」
「皆がですか」
「そうです。人一人、動物一匹欠けることなく」
ノアは言う。
「皆が乗るものです。それでいいですね」
「誰もがこの舟に乗って」
「そして洪水を」
「逃れましょう」
「皆で」
「私は。考えました」
その皆の言葉を聞いて。ノアはまた告白したのだった。
「果たして自分は正しいのかどうか。ですが」
「ですが？」
「正しかったです」
今それを皆に告げたのだった。
「ですからこのまま洪水が起これば」
「皆でですね」
「例え何があっても」
ノアはまた断言したのだった。
「いいです。ですから皆さん」
「ええ、何時までも一緒ですよ」
「ノアさんと」
「御願いします」
彼等は笑顔でノアに告げたのだった。
「是非皆で」
「洪水を乗り切りましょう」
こうして洪水の時には皆が舟に乗り込むことになった。それから

暫くして雨が降りだした。それは極めて強いもので忽ちのうちに河を溢れさせてしまった。
それを見て妻は。ノアに声をかけてきたのだった。
「あなた」
「うむ」
ノアは妻の言葉に対して頷いたのだった。
「そうだな。いよいよだ」
「皆さんを御呼びしましょう」
「動物達もな」
「そうね」
妻もまたノアの言葉に頷いたのだった。
「皆でだからね」
「そうだ。では皆を呼んで」
「ええ」
彼等は頷き合い皆を呼んだ。そうして動物まで全て乗り込まさせて。水の上に舟が浮かんだのだった。いよいよ舟が動こうとしていた。最早水は海の様になっていた。
「助かるか」
「多分」
当然舟の中にはノアも妻もいる。妻はノアに対して答えていた。
「皆乗り込んだしこれで」
「だがな」
しかしここで。ノアは顔を曇らせるのだった。
「わしは神に背いた」
今そのことを振り返り顔を曇らせたのである。
「多くの人を助けること自体が。背いたことになるのならな」
「そうね。そしてそれは私も同じ」
妻もまた。同じだと認めるのであった。
「あなたと同じ罪を犯したわ」
「ではいざという時はだ」

「そうね」
ノアの言葉に応える。
「二人で潔く罰を受けようぞ」
「二人で」
一度した決意をまた確かめ合う。そしてその時だった。不意に彼等のところに。あの声が聞こえてきたのだった。厳かなあの声が。
「ノアよ」
彼はまずノアに声をかけてきた。
「我の声が聞こえるな」
「はい」
ノアは毅然としてその声に応えた。
「聞こえております。確かに」
「そうか。ならばよい」
「今ここに来られた訳は」
「決まっておろう。御前に問いたい」
「私にですか」
「そうだ」
声に険しいものが込められた。まるで雷の様な声になっていた。
「我は言った筈だ。御前の家族と動物のつがいだけを救えとな」
「確かに」
「我は間違いを犯さぬ」
このことも言ってきた。
「このことは確かに伝えておいたな」
「その通りです」
このこともまた認めたノアであった。
「確かに仰いました。神よ、貴方は」
「では何故だ」
ノアに問うてきた。
「何故我の言葉を破ったのだ」
「全ての者をこの舟に入れたことですね」

「御前の家族以外は神に背いていた」
神は言う。
「そして動物もまた。つがい以外はいらなかった。それをどうしてだ」
「私は思ったのです」
ノアはその厳かな、雷の如き言葉に身体が震えてたまらなかった。しかしそれでもであった。必死に心を震わせて神に対して答えるのであった。
「誰もが正しい心を持っておられます」
「そう思ったのだな」
「そうです」
またはっきりと述べてみせた。
「私は。そう思いました」
「それで皆を助けたのか」
「そうです」
またしても答えた。毅然として。
「助けました。そのことを認めます」
「ではまた聞こう」
神は答えなかった。そのかわりまたノアに問うてきた。
「何でしょうか」
「御前は動物達も全て舟に入れたな」
「その通りです」
この問いにも答えるノアだった。
「今この舟の中にいます。皆」
「つがいだけと命じた筈」
神は問う。
「それでどうしてだ。何故皆入れたのだ」
「動物にもまた心があるからです」
「心があると申すか」
「そうです」

ノアはまたしても毅然として答えたのだった。
「動物達にも心があります。その証拠に」
「証拠に？」
「私が舟を建る時に彼等は助けてくれました」
「御前をか」
「その通りです。そしてそれは」
ノアはさらに言う。
「人も同じです。私の家族以外の人々もまた」
「御前を手伝ったというのか」
「訳も何も言わず」
このことを正直に神に告げたのだった。
「私を手伝ってくれました」
「だから皆を入れたか」
「最初に。そう決めはしました」
「最初にだと」
「はい、そうです」
それもまた認めるノアであった。
「皆を救おうと舟を建っていきました」
「それを皆が手伝ったか」
「私の為に」
ノアはまた事実を神に告げた。

第六章

「手伝ってくれました。人も動物達も」
「その心を受けてのことか」
「その通りです」
ノアの返答は続く。
「神よ」
「何だ」
そのノアの言葉から神も逃れられなくなっていた。
「これを罪と仰りますか」
「無論だ」
ここでも神の言葉は己に対する絶対の自信に満ちていた。彼はここでもやはり神であった。己を疑うことを知らないのが神であるというのなら。
「御前は我に逆らった」
「はい」
ノアもそれは認める。
「それは紛れもない事実。御前は許されぬ罪を犯した」
「承知しております」
「私もです」
ノアは無意識のうちに頭を垂れていた。これは妻も同じだった。
「罪を犯したのは事実です」
「神に逆らいました」
頭を垂れたまま神に答えていく。
「だからこそそれならば」
「裁きを喜んで受けましょう」
「受けるのだな」
「嘘は申しません」
やはり言葉を隠さない。そのまま述べていく。己の心を。

「罪を受けるべきは我等だけ」
「ですから。それならば今ここで」
「ならばだ」
ここで神は厳かな声を述べてきた。
「全ての者を導くのだ」
「なっ！？」
「神よ、それは一体」
「今言ったまでだ。罪を犯したのだな」
「その通りです」
「ですから今こうして」
「その罰を今告げているのだ」
神は言葉を続ける。しかしこれはノアと妻にとってはすぐにわからない言葉だった。それで神の言葉を理解できないまま聞いていた。
「助けた全ての者を正しく導くのだ」
「正しくですか」
「罰を受けると言ったな」
「はい」
そのことに偽りはない。覚悟は決めていた。
「それならばだ」
「それならば」
「御前が信じたようにするのだ」
これが神の言葉であった。
「助けた命を。そのまま導くのだ」
「洪水の後にですか」
「では聞こう」
今度はノアに対して問うてきた。
「ノアよ」
「はい」
「御前はただ舟に皆を入れたかっただけか」
「いえ」

その問いにはすぐに首を横に振って否定するノアだった。無論それで終わりとは思っていなかった。そこから先まで考えているのもまたノアなのだ。
「無論それで終わりとは思っていません」
「そうだな」
「大事なのはこれからです」
はっきりとした声で神に答えるのだった。
「洪水の後の世界で。皆が生きていくこと、これこそが大事です」
「それがわかっているならばよい」
神はまずはその言葉を受けた。
「それでだ」
「それで」
「我が御前に与える罰はそれだ」
あらためてノアに告げてきた。
「見事皆を導くのだ」
「それが私に与えられた罰」
「果たせぬ時、その時は」
「その時は」
「我の力の一つである雷を御前の上に落とす」
そう宣言したのだった。言うまでもなく本気である。神もまた偽りは口にはしない。やはりそれも神なのだ。だからこそ神となっているのだ。
「そして御前も妻もその身を焼かれるのだ。わかったな」
「わかりました」
神のその言葉にまた頭を垂れた。
「肝に命じました」
「よし。ならば見せてみよ」
ここまで話を聞いてからの言葉だった。
「御前のその罰を。よいな」
「はい」

「我は常に見ている。空の上からな」
「空の上からですか」
「だからこそ全てが見えるのだ」
つまり隠すことはできないと。言っているのだ。
「御前のすることもな。よいな」
「それもまた肝に命じておきます」
「言うのはこれまでだ」
ここまで話して話を終わりとしてきた。

第七章

「我は去る。よいな」
「わかりました。それでは」
「上から。存分に見せてもらおう。御前の罪の償いをな」
これで神は消えた。後に残るのはノアとその妻だけである。二人は神の声が聞こえなくなると顔を見合わせて。そのうえで二人だけで話をはじめるのだった。
「聞いたな」
「ええ」
まずは確認からはじまった。
「聞いたわ。あなたも同じなのね」
「御前も同じなのだな」
「そうよ。皆を導く」
「そうだ」
確かに聞いたのだった。このことを。
「洪水の後な。それがわし等の罰だ」
「できるわよね」
「できる。いや」
ここでノアは。その言葉を変えたのだった。
「やらなければならない」
「やらなければならない？」
「そうだ。何があってもやらなければならない」
ノアはここでも強い言葉を出すのだった。それは己に言い聞かせているかのような強い言葉だった。そして妻にもこの言葉は心に響いていた。
「皆の為にな」
「皆の為。そうね」
「そうだ。わし等が皆を導かなければどうする」

強い責任感に満ちた言葉だった。これは皆を乗せる舟にしようと決意した時と同じだった。その決意を再び誓ったのである。彼は今ここで。

「誰もいない。違うか」

「いえ、そうね」

そして妻もその強さを受けて応えて頷くのだった。

「その通りよ。だからこそ」

「やるぞ」

妻に対して告げた。

「何があろうともな」

「何があろうともなのね」

「そうだ。絶対にだ」

またしても強い言葉だった。

「やり遂げる。いいな」

「ええ、じゃあ私もまた」

「そうだ。二人でだ」

ノアの次の言葉はこれだった。あくまで己の妻を信頼して。この言葉を口にしたのだった。二人は最早二人で一人であった。そこまで絆を深いものにさせていたのだ。

「やるぞ。いいな」

「ええ」

その言葉に頷き合い誓い合う。その時だった。

「ノアさん」

「雨が止んだぞ」

部屋に人々が入って来た。そうしてノアに雨が止んだことを伝えるのだった。

「雨が止んだのですか」

「ああ、そうだ」

「それでどうするのだ？」

「はい、それでは」

ここでノアの脳裏にあることが閃いた。そのことをそのまま語るのだった。
「鳩を呼んで下さい」
「鳩をですか」
「そうです」
鳩を呼ぶと言った。これがどうしてなのかわかる者はいなかった。しかしノアはわかっていた。そして舟の甲板に出るとまず一羽の鳩を放した。それから言った。
「まずは外を見てくれ」
「外を？」
「どういうことですか」
ノアを認める人々はまだわからない。それでノアに対して問うのであった。
「鳩を飛ばしたのはどうして」
「何かあるのですか」
「はい、あります」
はっきりとした声でその人々に対して答えたのだった。
「鳩が戻って来て」
「戻って来て」
「何かを持って帰ればそれでわかります」
「それでですか」
「そうです」
空を見つつ出された言葉だった。鳩が飛び去ったその空を。
「そしてその方角に舟を向けます。宜しいですね」
「わかりました。それでは」
「そのように」
人々はノアの言葉を信じることにした。ここでもノアを信じるのだった。
「行きましょう、ノアさん」
「その行く先に」

「はい。それではそれで」
これでまた決まった。彼等はまずは鳩を待った。そうして暫くして。鳩は恵みの葡萄の蔓を持って帰ってきた。ノアはその葡萄を見て皆に言った。
「陸地です」
「陸地ですか」
「はい。鳩は葡萄の蔓を持って帰ってきましたね」
「ええ、確かに」
「今こうして」
彼等は皆ノアのその言葉に頷いた。
「そこに陸があります。葡萄の蔓があった方に」
「そこにですか」
「はい、そうです」
ノアはまた答えた。
「あります。ではそこに行きましょう」
「ええ。ノアさんの言われることなら」
「是非共」
「すいません、最後の最後まで」
あくまでノアを信じる彼等の言葉を聞いてノア自身は。ここでもまた深い感慨に浸るのだった。しかしその感慨に何時までも浸る時間はなかった。
「では行きましょう」
「はい、陸に」
「我々の新しい場所へ」
「行きましょう」
こうして彼等は陸地に向かうのだった。彼等が向かうその場所への道もまたノアが導く。ノアを信じ皆それに従う。巨大な箱舟を導きながらノアは自分を信じてくれる人々の心を感じ取っていた。それは何よりも温かく美しいものであった。彼にとっては。

箱舟

完

2008・6・29

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9837e/

箱舟

2010年10月8日15時04分発行